

板垣市藏編

日本文學新抄

前篇

明治書院發行

板垣市藏編

日本文學新抄 前篇

【上古・中古文學篇】

東京 明治書院

昭和二十三年七月十日印
昭和二十三年七月十五日發
昭和三十一年六月十日十六版發行

日本文學新抄 前篇

定價 金百參拾五圓

編者 板垣市藏

發行者 東京都千代田区神田錦町一丁目十六番地
株式會社 明治書院

代表者 文入宗義

印刷者 東京都千代田区神田三崎町一丁目一番地
有限會社 清文堂印刷所

代表者 鈴木一

發行所

東京都千代田区神田錦町一丁目
(振替口座東京四九九一番)

株式會社

明治書院

電話東京 (29)

〇三五四〇番
三三六八〇番
三九二七番

凡 例

一、本書は主として新制高等學校上級の國語科用、若しくは新制大學の文學講座の教授用として編纂したものであります。しかし一般の教養書として適切な讀み物であることは申すまでもありません。

一、本書は前篇（上古・中古の代表的作品）・後篇（近古・近世の代表的作品）の二部より成つてをりますが、別冊の現代日本文學新抄と共に、三部として、日本文學全視野中の代表的なものを網羅し、日本文學の特質を窺ひ知ることの出来るやうにとの心構へで、編纂したものであります。

一、従つて日本文學を詩歌・戯曲・物語・小説・日記・隨筆等に大別して、それぞれの下に、各時代の代表的作品を採り、しかもその作品としての全貌を窺ひ得るやう特に留意して採擇致しました。比較的分量多く採つた理由は、學生の自學自習に資するためであります。

一、教科書たるの性質上、適宜に削除訂正した個所もありますが、出来るだけ原本の姿そのまゝと致しました。従つてある個所には宛字・音便・假名遣・送假名等について、現代の學生には奇異の感を懷く處が少くないことゝ思ひます。かゝる處は教授者の補正に俟つことゝ致しました。

一、頭註は人名・地名の簡単な説明、竝に故事典據を示すに止めました。これは實際教授に當つて、板書の煩を避けるを得るに便したに過ぎません。他は一切教授者の説明補正に委ねました。

一、編者は多忙の間に手掛けたものでありますから、不備の點の多いことは申すまでもありません。その不備の點及び編者の意の到らぬところは、大方の御教示を御待ちして居るものであります。

昭和二十三年六月

編 者

日本文學新抄 前篇 目次

第一篇 和歌篇

萬葉集

卷第一	二
卷第二	八
卷第三	一四
卷第四	一八
卷第五	二一
卷第六	二六
卷第七	二七
卷第八	三〇
卷第九	三二
卷第十	三四
卷第十一	三六
卷第十二	三七
卷第十三	三八

卷第十四	三九
卷第十五	四二
卷第十六	四四
卷第十七	四五
卷第十八	四七
卷第十九	五〇
卷第二十	五二

古今和歌集

序	五四
卷第一 春歌上	六〇
卷第二 春歌下	六二
卷第三 夏歌	六三
卷第四 秋歌上	六四
卷第五 秋歌下	六五
卷第六 冬歌	六七
卷第七 賀歌	六八
卷第八 離別歌	六九
卷第九 羈旅歌	七〇

卷第十 物名	七
卷第十一—卷第十五 戀歌	七二
卷第十六 哀傷歌	七五
卷第十七—卷第十八 雜歌	七六
卷第十九 雜體	八〇
卷第二十 大歌所御歌・神あそび歌・東歌	八一

第二篇 神話・傳説篇

古事記

序 文	八四
天地初發	八八
神世七代	八八
國土の修理固成	八八
國生みの物語	八九
三貴子分治	九一
天岩屋戸物語	九二
國讓物語	九四
天孫降臨	九七

神武天皇	九九
------	----

第三篇 物語篇

竹取物語

一 今は昔、竹取の翁	一一〇
二 さて赫映姫客世に似ず	一一四
三 この事を帝きこしめして	一二〇

伊勢物語

一 初冠して(一段)	一二七
二 その男、身を益なきものに思ひなして(八段)	一二七
三 紀有常といふ人ありけり(十五段)	一二九
四 田舎わたらひしける人の子ども(二十二段)	一三一
五 惟喬のみこと申す親王(八十一段)	一三二
六 水無瀬にかよひ給ひし(八十二段)	一三四
七 身はいやしなから(八十三段)	一三五
八 津の國菟原郡蘆屋の里(八十六段)	一三六
九 左兵衛督なりける(百段)	一三七

一〇 わづらひて心地死ねべく(百廿五段)……………一三八

源氏物語

桐壺

一 いづれの御時にか……………一三九

二 野分だちて……………一四四

三 月日経て……………一五一

四 年月に添へて……………一五三

帚木

一 光源氏、名のみことごとしう……………一五九

二 なりのぼれども……………一六三

三 はやう、まだいと下臈に……………一七〇

四 なにがしは癡者の物語をせむ……………一七七

夕顔

一 六條わたりの御忍びありきの頃……………一八三

二 八月十五日夜隈なき月影に……………一八六

大鏡

序	一九七
---	-----

太政大臣道長

一 この大臣は法興院の	二〇二
二 この殿事に觸れて	二〇四
三 故女院の御修法して	二〇八

堤中納言物語

一 花櫻折る少將	二一一
二 蟲愛づる姫君	二一五

第四篇 日記・隨筆篇

土佐日記	二二四
------	-----

更級日記

一 あづまぢの道のはてよりも	二三三
二 足柄山といふは	二三六
三 その春、世の中いみじうさわがしうて	二三九
四 上達部・殿上人などに	二四一
五 世の中に、とにかくに心のみ盡すに	二四五

枕草子

一	春は曙(一段).....	二四九
二	正月一日は(三段).....	二四九
三	思はむ子を法師に(五段).....	二五三
四	上にさぶらふ御猫は(七段).....	二五三
五	清涼殿の丑寅の隅の(二十段).....	二五六
六	すさまじきもの(二十一)段).....	二六一
七	にくきもの(二十四段).....	二六五
八	小白河といふ所は(三十二段).....	二六八
九	木の花は(三十四段).....	二七二
一〇	あてなるもの(三十九段).....	二七四
一一	蟲は(四十段).....	二七四
一二	頭の中將のそぞろなるをらごきを聞きて(七十段).....	二七五
一三	頭の辨の職に参り給ひて(百十七段).....	二七九
一四	うつくしきもの(百三十二段).....	二八〇
一五	宮に始めて参りたる頃(百六十段).....	二八一
一六	雪いと高く降りたるを(二百五十六段).....	二八六
一七	物暗うなりて(三百段).....	二八七
一八	左中將のいまだ(三百一段).....	二八八

第一篇
和歌篇

萬葉集

卷第一

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代
ハツセアサクラノ
オホハツセワカマケノ

天皇御製歌

1 籠もよ み籠持ち ふぐしもよ みふぐしもち この岳に 榮摘ます兒 家聞かな 名告らさ
ね そらみつ やまとの國は おしなべて 吾こそ居れ 敷きなべて 吾こそませ 我こそは

告らめ 家をも名をも

高市岡本宮御宇天皇代
タケチヲカモトノ
オキナガタラニヒロヌリノ

○高市岡本宮
大和國高市郡飛
鳥村字雷の東方
にあつたといは
れてゐる。
○息長足日廣額
天皇舒明天皇

○泊瀬朝倉宮
人知國磯城郡朝
倉村大字黒崎附
近であつたとい
はれてゐる。
○太泊瀬稚武天
皇雄略天皇

天皇登三香具山望レ國之時御製歌

○香具山—大和國磯城郡香久山村。

○海原—香具山の麓にあつたといはれる埴安池。

○後岡本宮—齊明天皇二年、先づに御造營になられたのでかくいふ。

○天豐財重日足姫天皇—齊明天皇。

○額田王—鏡王の女。天智・天武兩朝の頃の人。

○熟田津—今の道後温泉の附近といふ。

○中大兄—後の天智天皇。

○三山—大和三山。(天香具山・耳梨山・畝佐山)。

○印南國原—播磨國印南郡の印南野。播磨風土記に「出雲國阿蘇大神聞三山梨國畝火香山耳梨三山相闕」此欲三

2 大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 國見をすれば 國原は 煙立ち

立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし國ぞ あきつ島 大和の國は

後岡本宮御宇天皇代 天豐財重日足姫天皇後即位後岡本宮

額田王歌

8 熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

右檢三山上憶良大夫類聚歌林に、飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑、九年丁酉十二月己巳朔壬午、天皇大后幸于伊豫湯宮。後岡本宮貶宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅、御船西征始就于海路。庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮。天皇御慶昔日猶存之物當時忽起感懷之情。所以因製歌詠爲之哀傷也。卽此歌者天皇御製焉、但額田王歌者別有四首。

中大兄 近江宮御宇天皇 三山歌一首

13 香具山は 畝火ををしと 耳梨と 相證競ひき 神代より 斯くなるらし 古昔も 然なれこ

そ 現身も 嬌を 争ふらしき

反歌

14 香具山と 耳梨山と あひし時 立ちて見に來し 印南國原

第一篇 和歌篇

諫止^ニ上^ニ來^ニ之時
到^ニ於^ニ此^ニ處^ニ乃
聞^ニ闕^ニ止^ニ覆^ニ其
所^ニ乘^ニ之^ニ船^ニ而
之^ニとある。

15 渡津海の 豊旗雲に 入日さし 今夜の月夜 清明くこそ

右一首歌、今案不^レ似^ニ反歌^ニ也。但舊本以^ニ此歌^ニ載^ニ於^ニ反歌^ニ。故今猶載^ニ此次^ニ。亦紀曰、天豐財重日足姫

天皇先四年乙巳、立^ニ天皇^ニ爲^ニ皇太子^ニ。

○近江大津宮
近江國滋賀郡大津附近にあつた。

近江大津宮御宇天皇 天命開別天皇

○天智天皇
天智天皇

額田王下^ニ近江國^ニ時作歌、井戸王即和歌

17 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山のまに い隠るまで 道の隈 い積るまでに

つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠さふべしや

反歌

18 三輪山を しかも隠すか 雲だにも 情あらなむ 隠さふべしや

○奈良の山
奈良市の北に

右二首歌、山上憶良大夫類聚歌林曰、遷都近江國時御覽三輪山御歌焉。日本書紀曰、六年丙寅春三月

辛酉朔己卯遷都于近江。

○皇太子
天皇の皇子

天皇遊^ニ獵蒲生野^ニ時額田王作歌

20 茜草さす 紫草野行 標野行 野守は見ずや 君が袖振る

○皇太子
天皇の皇子

皇太子答御歌 明日香宮御宇天皇

21 紫草の むらさき にほへる妹を 憎くあらば 人婦ゆゑに 吾戀ひめやも

紀曰、天皇七年丁卯夏五月五日縱獵蒲生野。于レ時太皇弟・諸王・内臣及群臣皆悉從焉。

藤原宮御宇天皇代 高天原廣野姫天皇

天皇御製歌

28 春過ぎて 夏來るらし 白妙の しろたへ 衣ほしたり 天の香山

過近江荒都・時柿本朝臣人麿作歌

29 玉櫛 たまき 敵火の山の 檣原の かきはら ひじりの御代ゆ 生れましし 神のごとと 樛の木の いやつ

ぎつぎに 天の下 知らしめししを 天にみつ 倭を置きて 青丹吉 奈良山を越え いかさ

まに おもほしめせか 天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津の宮

に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は 此處と聞けども 大殿は 此處と

言へども 春草の 茂く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 百磯城の 大宮處 見れば悲しも

反歌

30 ささなみの 志賀の しが 辛崎 からさき 幸くあれど 大宮人の 船待らかねつ

31 ささなみの 志賀の おほわだ 淀むとも 昔の人に またも逢はめやも

第一篇 和歌篇

五

○藤原宮・大和國高市郡鴨近村大字高殿附近に
あつた。○持統天皇武兩朝の皇居。
○高天原廣野姫天皇・持統天皇。
○近江荒都・天智天皇は十一年二月崩御。翌年七月壬申の亂起り近江大津宮に歸す。
○柿本朝臣人麿・持統・文武兩朝の一人。萬葉集第一の歌人。傳未詳。

○志賀の辛崎・近江國滋賀郡唐崎。